

をおいた報告は少ない。

目的：白血病病変の分症としての口腔の臨床所見が、病理組織学的にいかなる所見を呈するかを知り、それらの関連性を考察する。

材料及び方法：東北大学医学部、歯学部における白血病剖検例より、歯を含め顎骨を採取した。白血病の種類は急性骨髄性白血病6例、慢性骨髄性白血病1例で男3、女4症例、年齢は12歳より60歳である。被検材料の採取部位は、上顎臼歯部及び下顎で、採取後直ちに10%ホルマリンに固定した。唇、頬舌方向に切断し脱灰、通法に従いヘマトキシリン・エオジン、鍍銀、弾力線維染色等を行い観察した。

結果及び考察：全例に口腔粘膜への白血病細胞の浸潤がみられ、2例に歯肉腫大がみられた。白血病細胞の浸潤部位は、①内縁上皮②骨髄③外縁上皮④歯根膜⑤歯髄にわけられ、高度例では①より⑤まで、中度例では①より③、低度例では①と②という傾向がみられ、それらは炎症巣及び血管の構築に由来した現象と理解される。また臨床的血液所見と口腔所見とは関連性があり、白血病の初発症状としての歯肉出血は、歯肉嚢上皮より滲み出る白血病細胞を混入した出血と思われる。

参考文献：1) 柘植 精一：白血病に於ける口腔病変の病理学的研究。名古屋医学 76：125-134, 1958. 2) Carranza, F.A., Gravina, O. and Cabrini, R.L.: Periodontal and pulpal pathosis in leukemic mice. Oral Surg. 20: 374-379, 1965. 3) Peterson, D.E., Gerad, H. and Williams, L.E.: An unusual instance of leukemic infiltrate, diagnosis, and management of periapical tooth involvement. Cancer 51: 1716-1719, 1983.

### 9. 糖尿病患者における歯周疾患の状態

石川潤一、蝦名徹哉、草野郁子、佐々木俊明  
島田 実、八巻恵子、佐々木静治、遠藤英昭  
神山義信、堀内 博（歯科保存1）

これまでも糖尿病と歯周疾患との関係について多くの報告がなされてきているが、見解は各研究者間で異なっている。今回、我々は糖尿病患者と非糖尿病患者について口腔衛生状態や歯周疾患の罹患状態などを調査し、比較する機会を得たので報告する。

被験者は、東北大学医学部付属病院第3内科で治療を受けている糖尿病患者147名（DM群）と歯科に来院し、自覚している全身疾患を持たない、ほぼ同じ年

齢層の歯科患者75名（non-DM群）である。年齢はDM群で平均57.8歳、non-DM群で平均52.2歳であった。両群とも糖尿病かどうかの判定は、血糖値、HbA<sub>1</sub>、HbA<sub>1c</sub>の測定によって行い、第3内科の医師が行った。被検者には質問表による調査、口腔内写真の撮影を行い、次いで通常の口腔内診査とともに、以下の測定を行った。

- 1) ペリオトロンによるポケット滲出液量
- 2) Bleeding Index
- 3) 歯周ポケットの深さ
- 4) Plaque Control Record

なお、1)~4)の各測定は実験期間を通じ、それぞれ同一検者が行った。本報告は前歯部のみについて、しかも調査資料の一部をまとめたものである。

DM群の方がnon-DM群に比べて、年齢、血糖値、HbA<sub>1</sub>、喪失歯数について統計学的に有意に大きい値を示した。また、ペリオトロン値、Bleeding Index、Plaque Control Record、ポケットの深さについて、DM群の方が危険率0.1%で有意に高い値を示した。年齢を50歳以下、51~60歳、61歳以上の3グループに分けて比較したところ、HbA<sub>1</sub>はDM群の方がnon-DM群に比べ、有意に高い値を示した。残存歯数ではDM群、non-DM群の対応する年齢間に有意差は認められなかった。ペリオトロン値、Bleeding Index、Plaque Control Record、ポケットの深さについては、対応する年齢でDM群とnon-DM群の間には、ほとんどの場合有意差がみられ、DM群の方が大きかった。

### 10. 広範な口腔粘膜に多数の色素斑がみられた1例

中島 浩、永山正明、鈴木正規、遠藤義隆  
川村 仁、林 進武（口腔外科1）

このたびわれわれは、63歳の女性において、広範な口腔粘膜に、多数の色素斑を生じた症例を経験したので、その概要を報告した。

既往歴：20年前に頭部の腫瘍を摘出し、経過は良好であった。3年前から慢性胃炎、慢性肝炎のため薬物療法中であった。

現病歴：10年前、両側頬粘膜に黒色の色素斑を認め、5年程前から拡がって来たような気がしたが放置。昭和57年に某病院内科にてそれを指摘され、Peutz-Jeghers症候群の疑いから消化管の検査を受けるも異常なしと言われた。昭和59年に某歯科から当科を紹介され、同年12月5日に来院した。